



15
2109
15



扶桑皇統記圖會後編卷之二目錄

決山過入隱室遭危難

惡僧伏刑決山室月雲條

无頼の悪僧隱室を見らば決山と捨れりる圖

釋空海幼稚奇行
阿波大瀧室佐室奇苦行支

室戸の菴室小悪龍現下空海と試と圖

空海師入唐求法
以五筆書詩水上題詩條

文珠童子小現下空海小奇瑞と見せりる圖

空海師歸朝鎮難風

投筆并隔溪書額條

東大寺蜂怪南圓堂建立 高野山開発伽藍造立

清滝川と隔て空海額の文字を書圖

東寺賜空海西寺賜守敏 空海守敏法力優劣條

嵯峨天皇御即位 守敏空海祈雨争法力條

女人禁制と犯して空海の母種との怪異小あひ圖

母公阿刀氏望登高野山 山中怪異慈尊院の條

終

扶桑皇統記圖會後編卷之三

浪華好華堂野亭参考

浅山過入隱室遭危難

惡僧伏刑浅山音雲條

浅山玄吾八音賢院の記録郎とたりて緒更小氣を働して執贖ひける事

任僧清眞の適意情をうけて召使ひ玄吾が物給小勤学の望ある事

それ八場丸更かり當院へも禁宦の儒先生より来りて何をの儒家の門

生ふるも心任せたり先四書の如く我教道得たりとて寺教の暇

ある折へ素續の指南に多く玄吾好む道あるを昼夜を捨て

多る在生賃記憶よく秀才の玄吾更進く学業進く清眞も感

宦小頼と玄吾と入門をせざる玄吾大不恰ひ弥切砥琢磨の功を折

一文と綴る事と租會得し儒宦の書生少も知音多かり折節は詩會の席未



小連るやうふあり。和韻贈答わして。樂之凡音賢菴小勤仕とる。更三年余。及おまび寺中の和尚おせうも皆面みなを知し。何なにの房むらも親おやく入いりたるが。一時任ある侶り清きよ真まと檀越だんてつの佛ぶつ更また招まねれて留とど守まもり。然しかに玄げん吾ご徒と無なる。修しゆし寺中の文珠ぶんしゆ菴あんの任にん侶りよを為な空くうと呼よび。常つね小こ玄げん吾ごと招まねれ。因よ基きの對あひ手てとくく。更また人ひと為な空くうと訪たずふんと文珠ぶんしゆ菴あんいり。是こゝも他た出いせし。厨いふ所ところ小こ僧そう兩りゆう人にん机つく小こ倚よりて睡ねり居ゐるのこゝも音おと多おほし。答こたへる人ひとも。諸しよ小こ為な空くう和尚おせうも留とど守まもり。望のぞみを失うひ。いり。い。當とう院いんの泉せん載ざいを。一いつ見けんせ。れ。幸さいひの折せ々せり。子こ細こ小こ足ある。思おもひ露ろ路ろとを。後こう園えん小こり。て。る。小こ泉せん水すい築ちく山さん樹じゆ木ぼくの植うえ。い。面白おもしろく。覺おぼえ。真ま不ふ乘せうと。橋はしを。こ。り。山やま小こ登のぼり。溪せき下くだり。流ながれ。を。歩あり。こ。り。奥おく深ふかく。行ゆく。小こ樹じゆ林りんの裡うち小こ樓ろうと。く。隱ひそか。小こ双すわう六りくの筒つづを。揮ふる音ね安やすえ。れ。諸しよ小こ為な空くう和尚おせうハ遊あそ客かくと。有あり。彼あ樓ろう小こ双すわう六りくを。キ。樂たのま。る。小こと。美う次じに。竟つひ思おもふ。と。独ひとり言ごと。茂しげ林りんの裡うち行ゆく。是こゝも小

果はと亭てい有ある。小こと何なに心こころなく。入いり。梯はしと。登のぼり。る。小こと。豈あら。ん。ん。為な空くうハ。あ。で。容よう貌ぼう美み麗れい女にょ人にんさ。向むかひ。双すわう六りくを。キ。居ゐる。が。吾ごを。顧かへり。て。二に女にょと。大おほ小こ孩こさ。一いつ面めん色しき不ふて。脚あし身みハ。何なに人ひとあ。れ。を。此こゝ樓ろうハ。来きり。の。ひ。と。答こたへ。を。吾ご答こたへ。て。我われハ。普ふ賢けん菴あん小こ勤きん仕しと。る。者もの不ふて。い。が。為な空くう和尚おせうハ。内うち用ようあ。つ。て。忝かたじけな。い。と。厨いふ所ところ小こハ。ん。え。む。つ。と。後こう園えん小こや。脚あし坐まら。ん。と。庭てい前ぜん中ちゆうと。尋たづね。の。ひ。小こ此こゝ所ところ小こ双すわう六りくの筒つづ音ねの。中うちの。玄げん吾ごと。諸しよ小こ客かく人にんあ。で。樂たのむ。の。小こと。と。推おし量りやう。何なに心こころなく。入いり。無な礼らいの罪つみハ。知しり。の。で。謝あやま。り。小こ一いつ人ひとの女にょを。低ひめて。曰いく。脚あし身みハ。い。ま。此こゝ樓ろうの巨こゝろ細こを。知しる。な。か。く。此こゝ所ところ寺てい中ちゆうの僧そうの隱ひそき。遊あそぶ。所ところ也なり。他たの。人ひと過あり。て。此こゝ樓ろうハ。登のぼり。て。寺てい僧そう見けん付つける。者もの無なし。言いは。せ。と。逼せまり。殺ころす。と。怖おそろ。い。所ところな。り。疾はやく。歸かへり。と。色いろと。妻つまて。い。ふ。と。玄げん吾ご心こころに。り。諸しよ小こ脚あし身み達たつハ。任にん侶りよの。梵ぼん妻さい不ふて。お。つ。と。小こや。さ。も。あ。れ。此こゝ樓ろうハ。他たの。人ひとの。及およぶ。と。先ま逼せまり。殺ころす。と。の。こ。も。六りく心こころ得える。我われハ。寺てい中ちゆう小こ勤きん仕しと。る。者ものあ。れ。む。さ。る。更またも。い。は。す。先

御身方何國の人にて。くる寺院の梵妻となり。ふやと向ふ。女答て。妻江。堅田村。住藤嶋兵太と呼ぶ者。の女松枝といふ者。去り。年。此都。奉公。出或公家衆の館。奉公と侍。此寺の住僧。小購。此樓。押籠。られぬ。又是。あ。八都の街の絹買の妻。小て。お。と。覺淨。とい。僧。引。此所。連。来。り。一。す。も。此。樓。を。下。る。吏。を。許。さ。し。強。て。逼。り。辱。し。り。許。と。い。ふ。を。溢。り。殺。さん。と。言。ふ。恐。ろ。く。ま。為。方。な。て。劍。の。中。住。と。宿。る。たり。先。頃。此。寺。へ。入。る。人。過。り。此。樓。へ。登。り。と。住。僧。見。付。三。僧。より。て。溢。殺。し。後。の。山。埋。隠。し。を。宿。り。其。と。目。則。小。足。一。主。人。が。恐。ろ。く。悲。し。さ。何。を。う。あ。ん。推。量。り。御。身。も。さ。さ。る。無。慚。か。も。吏。小。遇。む。ら。ぬ。ち。不。疾。く。遁。去。り。と。涙。あ。ら。ず。語。る。云。吾。は。毎。小。駭。然。と。ま。ま。か。り。曰。諸。も。不。測。の。吏。も。い。ふ。子。我。素。ハ。加。賀。國。の。者。小。か。右。著。と。求。る。の。圃。を。立。て。都。へ。上。る。途。中。近。江。路。お。て。盜。賊。の。く。ち。小。衣。服。路。銀。を。奪。れ。為。方。あ。ま。湖。水。へ。身。

て。投。り。代。御。身。の。親。父。兵。太。殿。小。助。け。と。れ。種。々。教。訓。の。上。衣。服。路。銀。を。借。り。り。猶。ま。右。著。の。管。媒。と。す。預。り。當。寺。中。普。賢。院。へ。住。込。い。かり。其。即。一。入。息。女。を。都。へ。奉。公。小。出。せ。と。仰。あ。ら。す。御。身。が。思。人。兵。太。殿。の。御。息。女。と。い。ひ。ひ。さ。る。う。や。也。を。活。命。の。思。込。小。此。所。を。救。ひ。出。し。進。む。る。方。便。も。か。み。と。思。推。さ。る。間。も。あ。り。住。僧。為。空。樓。へ。上。り。来。り。云。五。と。り。て。お。孩。た。ら。ぬ。又。面。色。と。和。ら。げ。御。辺。何。用。有。て。此。樓。へ。上。れ。と。問。云。吾。親。を。卑。其。吏。小。今。日。主。人。清。真。佛。吏。小。矣。と。れ。田。守。中。徒。也。か。る。後。先。見。の。基。の。勝負。を。仕。ん。る。貴。院。へ。推。忝。い。さ。す。小。厨。所。小。ハ。見。え。む。い。と。後。園。あ。ら。ず。御。坐。る。や。と。尋。廻。り。を。う。む。此。所。へ。忝。り。無。礼。の。罪。免。れ。吏。さ。る。小。て。も。う。る。風。流。の。御。樂。と。今。で。隠。し。の。ひ。と。御。恨。た。れ。と。戲。吏。の。中。り。小。言。ん。も。為。空。六。各。と。も。せ。と。先。此。方。へ。来。り。い。と。云。五。を。伴。ひ。樓。と。下。り。室。の。内。へ。入。り。て。外。より。戸。を。咄。と。め。鎖。と。わ。ら。す。音。言。え。々。る。也。云。五。口。中。安。ら。ず。子。借。

御身方何國の人にて。くる寺院の梵妻となり。ふやと向ふ。女答て。妻江。堅田村。住藤嶋兵太と呼ぶ者。の女松枝といふ者。去り。年。此都。奉公。出或公家衆の館。奉公と侍。此寺の住僧。小購。此樓。押籠。られぬ。又是。あ。八都の街の絹買の妻。小て。お。と。覺淨。とい。僧。引。此所。連。来。り。一。す。も。此。樓。を。下。る。吏。を。許。さ。し。強。て。逼。り。辱。し。り。許。と。い。ふ。を。溢。り。殺。さん。と。言。ふ。恐。ろ。く。ま。為。方。な。て。劍。の。中。住。と。宿。る。たり。先。頃。此。寺。へ。入。る。人。過。り。此。樓。へ。登。り。と。住。僧。見。付。三。僧。より。て。溢。殺。し。後。の。山。埋。隠。し。を。宿。り。其。と。目。則。小。足。一。主。人。が。恐。ろ。く。悲。し。さ。何。を。う。あ。ん。推。量。り。御。身。も。さ。さ。る。無。慚。か。も。吏。小。遇。む。ら。ぬ。ち。不。疾。く。遁。去。り。と。涙。あ。ら。ず。語。る。云。吾。は。毎。小。駭。然。と。ま。ま。か。り。曰。諸。も。不。測。の。吏。も。い。ふ。子。我。素。ハ。加。賀。國。の。者。小。か。右。著。と。求。る。の。圃。を。立。て。都。へ。上。る。途。中。近。江。路。お。て。盜。賊。の。く。ち。小。衣。服。路。銀。を。奪。れ。為。方。あ。ま。湖。水。へ。身。

と松が枝が物落のての代をも逼り殺さん巧とたふ始より斯とあを飛う
く為空を捉へ左も右もせんむるものを賺と此場を通と公廳の所へん
思ひ手延ふと却て死穴小陥と悔れと後悔と喘むりわ程
為空六覚浄とる同僚の悪僧を伴ひ来り鎖を閉内小入玄吾とる眼
を瞶し你妻小我徒が密遊の樓上へ天命の尽る所なり今覚期と速
く小自滅せよと罵り懐中より細索と短刀と貼の毒薬と取出と去吾が前小
あぐ置此三品の中你が欲する品と死を急よと猶豫小及む我徒两个
て溢り殺とをうと言尾小付覚浄も悪む疾とせよと急立たり玄吾六世怖
て強心を押鎮ら且六日來の御好意も修る仰ふ下僕小御寺中小住者小
て所習は穴の狐小比れを何を和尚方の密更然他小洩しは如何の誓
詞神文をも書いべ此度の二命と助けると約束と謝頼れども為空朝

の者隠宅と知とも是と怒し有髮俗鉢の者親同絶朋友ととも決して死と
許さしと況や無縁の你小於於と詮めれ更を言入り疾寂滅せよと睨とて
言々も小玄吾まとい色を僕も剃髮得道と御弟子となり犬馬の勞と尽と
仕(も)るべ一万望御慈悲とて御助命給りすと涙とも小願ども両悪僧を馬
耳風と流し覺浄玄吾小亦向ひ你日來の常給ふ学業上達せむ官家へ仕
宜せんと言小非や然小今更の叶ひが望んで俄小剃髮と望むとも何と許す
べき你を生置て我徒杖を高くまがし死に遅滞せむ手と下さんと玄吾と
中小狭と己小逼り殺さん其体牛頭馬頭の罪人を呵責す小一般と玄吾ハ
其勢ひの通れとて絶とまき方便なく然仰とる上と力なく潔く刀小伏
死にいせ但一人清真御房此年来高恩を受且遺しと取亦要の

目六の一回會を交る日六二



浅山寺



光頼の
悪僧隠室
浅山寺
摘み寸

光頼の悪僧隠室

更もいむ生前二月逢しめの人を有心と快く自害しゆと言われし爲に
曰你清真小逢て助命と乞ふ人の對面を望むるもも。清真といふは我
と同意あれを敢て你を助をくす。然れども日來好殊小對面ハ得ず下
とて覺淨ともいふ吾を緊く縛り。然して覺淨小清真を呼來しむる間も
かく覺淨清真を同道とて来りたる諸清真ハ吾を縛りたる爲に致死
せし。去吾小向ひ你我が留守と守りて去外出と我徒ガ隱所を見し。你不覺
あり年来信やふ勤。你が此糸のハ見通し。是余。你が前生の惡業
爰小報ひかり。然れども昔くても王従とあり好殊を以て逼り殺し更公免
得さす下。只此三品を何まかりとも欲する品を用ひて自殺せよ亡骸ハ我埋
艱小跡を吊ひ得さす下と言せ。諸爲空覺淨小向ひ我徒三人ハ手あて渠一人
を逼り殺さん安んれども流石此年月召使し者あれ。手と下と小不忍此室小

因筆おけむ隱形の術を得りとも遁き出入更能べし。今日死せむんを明
日明日死せむんを明後日。よも五日と過さば。よも五日と過しとも死むを其時
小我手づつ。溢り殺さす。只皆渠が自滅するを待たずと容ゆるふより。兩人
も中しく納得し。きまをて三僧とも外へ出堅く鎖をあらして己が隨意立別
々々。玄吾只思ひゆゆぬ大難小遭。今ハ遁る小道。三僧の惡惡と惡と憤
り。我身の薄命と悲。胸を焼く腸を破る心地。かか。今ハ助る中。死命か
まむ。死して念の怨鬼とかり三僧を魁殺して此仇を報せんとの心を定む。ゆ
溢てや死せむん刃小や伏命れと索ととり上短刀を採て見し。思ふが處。更
小心決せむと忙し。途方小昏り。然る小樓上ハ松が枝。玄吾を寺僧の爲小
逼り殺さん。更を哀も。又兵太がきも惡善の心を以て命を助し者。又悲命の
死をふし。更の便あきと。心中小深く歎し。清真が宥あり。小依下なる。更小押

篁自殺せむるよしと規ひ少し心成安ん如何も救んものと今二人のことも
高儀一遁れ出ぬれ手段を微細と書きてめて算小堅く巻置とて板敷
の透間より下(落)かりたる去吾死覚期の思惟小迷ひ手と拱て黙と半
居る小忽ち上より落る音せり小紐と首と上て左右をえれ果して一物あり
手小把てえれ竹の算小巻る文なり急死巻戻と續てえれ松を枝か手跡
と見し室中と遁れ出ぬれ手段を犯し身と遁れ出ぬを官小松(ま)女們を由
救ひし人の文意かり去吾大い怡ひ海月の骨と得る思ひ人の教乃てく
草索の端小短刀と結付て梁とち越せ其索と手繰上り幸じて梁小付身
と匍匐て屋根際の際を短刀と切破りよと潜り出てえれ早月黄昏過
小く仄暗りるも天の佐と怡ひ下(座)下り後の山より無二無三小身と遁る万
死と出て一生をど得るも斯く其罪目ゆかりえれ三人の悪僧集會し今ハ

彼者自滅せり死骸と埋も隠んと樓の下の室小い鎖をあけて入る小
言そく人舌舌の死ハ影もええれ三僧とも愕然とて大い疑れ斯鉄掃の如
く堅固小建一板屋を如何と抜出んと評議し所と見檢る小屋根際の際と
人の潜るやと切破り有るも小借ハ彼所と遁れ出小疑ひなり先日逼て盗り
殺とぞれ奴を清真の釣小つて猶豫し捉逃せと大吏あれと足摺して悔めども
其詮方小為空面色如菜渠奴身と全るせ有司の廳(松)る治定なり我徒
僧法を犯して隠妻を殺し人を殺せし吏露頭せを必官吏召捕小来るぞ一噫
是れとも如何とえれと三人面を見令日來ハ奸智小けり悪僧們も眉と焼乃危
急小及び更小分別ゆ出ど惘景て癡人の如し清真とふく心を鎮め今更過
吏と子度悔も及えれ小あむと三人の女小宵他國(落)かりて身と隠せ我徒ハ雲
水修行と言立常影と隠さん如何と言えれを為空覺淨実もとけ意先

二二二

日の暮るまで二人の女は後の山深く身を隠しそ女乃凋度遊戯の緒を断りて
後園の井中へ沈み隠しおどろけし狼狽騒がるる手舞足の踏を知らざりし
を貪り賄下金銀を肌著專ら落度支度とどろき急たぐは是より前小浅山
去吾ハ左右とよみ楞嚴院の山を超て身を遁き年来懇意の学友許へゆ
楞嚴院の寺僧が奸悪の條と逐小告ぐれば皆遠を切て惡憤らざるハ
あし依て去吾ハ学友と俱に辨狀と書記て有司の廳へ辨へるなり即ち去吾ハ巨
細を少しし寺僧の惡行更明白おれを追捕の官吏數十人をさし遣され去
程小官吏の面々楞嚴院へ馳到り房毎小踏込寺内の僧俗を悉く搦捕する
小と為空清真覺淨三僧ハ本堂の内陣小寄集て旅支度を整へ居る小
早官吏向うとて歩みの外小仰天須弥壇の下佛像の影に隠れ這隠と佛
名と唱へ慄た居る小官吏来りて搜し出して搦捕二人の梵妻を尋する小更

小在所まればれむ三僧と曳居弘問はる小左右陳と白状せむ強く踏向
くれを苦痛不堪の遠小後の山小隠しる由白状する是小依て後の山を尋すの
二人の女も搦捕以上三十余人を曳て有司の廳へ入り斯と言上る小と悉く獄中
へ入置中も惡僧三人を水火の責おけて踏向せれる小己が惡行を悉く白状
お及びる有司甚く惡僧徒の身とて他人の女妻を勾引し刺し隠所を
見し者と逼り殺せし條言終り断の重罪なりとて大路の肆へ重く死刑行れ
其餘の者侵犯の糾かりとて三僧の奸惡邪淫と知るが疾辨へる罪小依て
重くハ流罪誑れを追放し行れ次小女ハ惡僧ども小白状され已更を得て
寺中小押筆を任せ趣れおれを罪なりとて其親夫を召出と列渡され去吾
と辨人の庶賞として金子と給り楞嚴院の一件落着し愈僧居の不潔を
林示しられたる浅山去吾ハ三僧の死刑行れ然るに憤を暗し且官より

御座美をまき給りり悦び度限りなく心小思ひく我両度の大危難を免れ
藤嶋又子の厚れ情小侍とて免れ恩を謝せざんむ有らば守とて堅
田村かゝ兵太が家小りり又子も再度の鴻恩を礼謝し謝義のめ一畧り金
子と呈し多小兵太固く辞して押返す吾が高運を賀し今度の折松小
依て女松が枝も無難小りり悦び吾と家小悦びの酒を酌りり松が
技いり定する夫も年々年齢も似合一れを遂小吾と婿とて取せり小
と吾大の小悦び京都へ出て医業を始り追々敏系昌し兵太を呼りり
夫婦孝養と竭し安樂小老と養へめり偏不徳徳の陽報なりり
釋空海幼推奇行 阿波大瀧山土佐室戸崎苦行吏

の先祖八景行天皇の皇子稻脊入彦命と申日本武尊小隨て東夷
を征伐し頗る勲功有るを其思賞して讃岐國小地を班ち給りり
より屏風浦を居所とす稻脊入彦命の孫阿良都別命の男豊嶋と云
人孝徳天皇の御宇小佐伯直と姓小後直を略して佐伯氏と名乗れ
其子孫の佐伯某伊豫親王の学師從五位下阿刀宿禰大足の姊と取て
妻とすと小佐伯氏初老の比や一子無を歎れ二室小祈誓して一子を授
めんと丹誠を凝し祈り其信心を諸佛も感納在り一夜の夢小一人の
聖僧端嚴微妙なるか妻阿刀氏の懐中入りて夢覚り諸夫
夢を語合ふ小は夢ありり奇異の思ひなり内程か阿刀氏妊
娠し十二月小平小男子と生り是光仁天皇五年六月十五日なり父母の
斜めりり靈夢を感じて信し子ありり維名と貴物と呼電受すること

掌の玉のぞく。此兒四五才の比より尋常の兒と交り遊むを。只土を掘て
像の形を作り或は竹木を以て堂舎の体と撰り。禮拜供養するを遊戯
とて樂むるふと。父母相結て此兒成長の後。出家得道すべしとせ
る。然も貴者六才の年。夢小諸の佛菩薩八葉の蓮花の上座して。說法
志ありとんり。されども稚心小の深く秘して。父母も夢の妻と結らば。内心小ハ
佛門入人の志願是より起り。斯て後。弥三室を崇り。菓餅を以て得
てハ先佛前供て供養。其後あてハ食する妻か。ハ才の年都の巡察使
續州。下向有るを。國中の男女老少路の両辺。群りて其行列を見物。小
貴者も衆人小雜りて。小見物。小巡察使貴者を見て。俄小馬より下
禮拜。其所を過て。馬小乗られ。小衆人不審暗む。何也や
んと私語合々る。吾小行さきて。巡察使の從者王小向ひ。今彼所小下馬

禮拜のひ人如何なる故か。いと伺ふ。巡察使が白俗人。いと彼所小下馬
小兒ハ人あま。四天王天蓋を捧て守護。又り我何と下馬せざんと語り
々る小。是より貴者と雜り。となく佐伯氏の子ハ神童あり。と云觸る。其
後貴者十二才小なり。いと小智万人小勝。其行迹長者も及む。三室を出入る
吏倍深り。一時又我子小向ひ。父の家督と嗣て先祖を耀。一國を治
めんとせり。と。出家得道して佛菩薩小仕んとせり。いと向ふ小貴者父と
これ武士となりて一國の政事とす。治るとも。統小一國の人民を安穩ありむるの
出家して佛道を修行。普く末世の衆生を濟度せん。と廣大の功德あり。と曰
々る小。と又も理小伏して。再ひ言と。世に多き。能く外戚阿刀大足。来りて佐
伯氏小曰。子息已小十二才。及むと。大學小入り。經史攻學。むむ。我部
將て上り教導す。と曰。れ。父母との恰ひ。其小順ひ貴者と。大足小預け

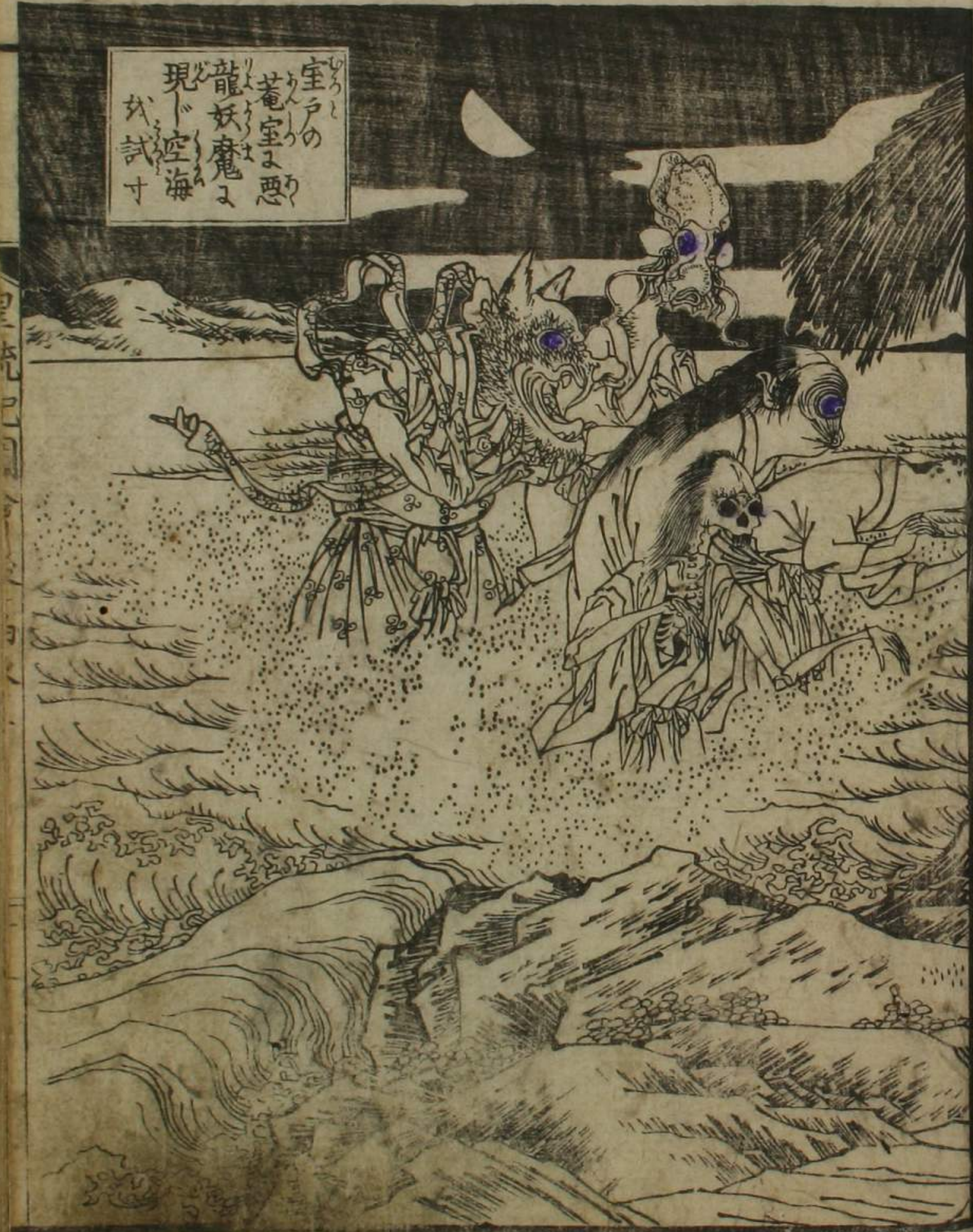
多るのへ大足貴者と持て都より大学へ入る積書と指南なる小天性人
あぬ奇童あれ一度積む暗記二度積む理に通る小足も大
感也我此見お不及と遠しと驚歎する斯て貴者大足の許小留學して
螢雪の功を積こ三年普く諸經を學び究め十五才の年學士淨成惠
毛待尚書易經等と學び十八才にて又岡田の博士小就て春秋左傳を學
ひ其余の書典涉獵せざる限もあ皆其深理温興を究め手跡ゆく無双の
能書なりををいす成童して博學能書の名世高然も貴者儒道
小心を留めど心中夢想今まで學びる典籍只眼前の理のあして一期の
後の利弱なり不如滅の福田を求人小とて岩淵の贈僧正勤操の弟子とあり
て佛道と學び切磋琢磨して大虛空藏あぶ小能滿虛空藏の法と授
りたり此法は往昔大安寺の道慈律師大唐小渡り緒法を學べ小善

免畏三藏小逢其與昔と授り歸朝の後大安寺の善儀小傳へ善儀小勤
操小授ける大秘密の法なり去程小貴者法名と免空と改り佛道修行小
丹誠を凝し三教指歸と書と編延暦十六年十二月初日草稿成就せり
其文意ハ俗教の益あるを述るれ也書の略小白朝市の栄花念く小是で
いひ嚴敷の烟霞ハ日小是を袂く狂肥流水とんくハ即ち電幻の秋也
勿心小起り支離懸鶉を見てハ則ち因果のあれ日毎小深し目小されて我
を勸む維風を収束む茲小一の親戚あり我を縛る小五常の素とて我
我断る小忠孝小背くとのて以て予思く物の心小あを飛沈性皆異
るのへ小聖者の人を得小教網小三種あり所謂秋李孔なり淺深隔有と
も並小皆聖鏡かりり一の羅小入を何を忠孝小背ん此書一部三卷
始と聾瞽指歸と題せり後小三教指歸と改められ今も世小傳り

晋く緇素賞覽せり。斯く无空六佛道修行の事晋く山林難所と涉
覽して修練の爲小身命と抛れり。師勤操僧正の苦行をあらはして
无空の十九歳の年延暦十四年和泉國槇尾山の中山西宝寺より於て剃髮せ
り沙弥の十戒七十二の威儀を授け法名を教海と改めり。後小又如空と稱せ
られり。延暦十四年四月九日東大寺於て唐僧春信律師と傳戒の導師
と。勝傳豊安以下と。小比女の具足戒を受此時名を空海と改め
らる。是より戒珠を胸の間に携へいよく俗塵を脱し
倍幽閑を去る。山より山へ入峯より峯へ入り練行日と重の薰修年と
送り煙霞と嘗て飢を忘る鳥獸を列く友と。或時阿波國大瀧乃嶽嶽
登り虚空藏の法を修行せり。忽ち一振の宝劍壇上へ祀来りて虚空
藏菩薩の靈感と顯る。件の宝劍大瀧が嶽の不動の嶽に今尚納れり

と。其後土佐國室戸崎ふりしれり。此地南海前小湛へ高巖側小持
松を拂嵐ハ旅人の夢を破り。苔とつる谷の水。隱士の耳と洗。空遠の地
ある。是を愛して草菴と結び。小住居とて求聞持の法と修。觀念せり
々々。明星中の散りて佛力の奇異と現り。空海即ち口中の明星を海
中小向ひて吐出せり。其先水小沈。末世の今ふり。追園夜ハ海底小星の
光聚。空より不思議と。いふ。疎かり。斯く室戸の菴室小行ひ澄して在り。多
小遠近の里人空海師の道德を慕ひ訪ひき。人々より。空海と
却る。是を煩々。物強し。れ。更小思ひ。一時の歌小
法性乃むら戸ときけど。我住む有為の波風寄ぬ日どあれ
と。縁どられり。此室戸の海小惡龍在て空海師の行法と妨んと種々の
形小変じて出現し。れ。空海公也。とて。少も怖。且。真言と唱へ。唾を吐

室戸の
蒼室の
龍妖魔
現空海
試す



くけられざる小其光散じて衆の星の圖と射る如し。是亦依て毒龍心と
なり退散して再び障碍をふと変能せむ。右の唾海濱の沙石小と云
て。今猶夜光の珠の如く昏れ夜小光を放つと云。室戸の崎より此余町
を隔て一箇の勝地あり。空海師其地小一字の伽藍を建金剛定寺と号け
られざる。法小其辺の魔魅佛法を障碍んと異類異形の姿と現るるを
空海即ち結界して魔縁と回答。我此所小在人限り。你们此寺へ来る
登るむとて。年歴大木の楠小自身の像と彫付置と云。魔類其後を
形次現し得ざりたり。其後空海師諸國を經曆して難山切所の今通ハ
ぬ所の道を踏開く。吏敷まれど播大國にて。老女の菴の柱小天地合の三
字と書付られ小其筆痕深く木小入り削と云。矢ど瘡疾流行病と受
者八件の文字と水小うらと飲を立所小愈ると云。又伊豆國桂谷小

虚空へ大般若經の大事品の文を書て永く大障と云。其他諸國小々
悪く毒蛇を降伏して人民の害と除く。吏敷まると。実小不可思議の名
僧と云。貴賤となく其法徳を尊信せむと云。りたり

空海師入唐求法

以五筆書詩水上題詩條

空海師佛法弘通の爲小諸國と廻り。遍く諸宗の碩徳小就て諸經の温
真を問究められれども。三乘五乘十二部の經猶心底小疑ふと云。看て
もる吏能にざりれども。佛前小於て誓願を起し。あれ願くハ三聖十方の諸
佛菩薩垂我小不二の要旨と示して疑ひを解しめり。一心小祈られり。心
夢小神人ありて告て曰大和國高市郡久禾の道場の東塔の本小妙經の
大毘盧遮那經と号く。是往古中天空の善无畏三藏此日本渡り彼道場
小収めむと云。り。早く彼所小到り右の妙經を覽して疑ひを解べと云

とて夢覺る。空海師大に歡喜ありて。和州久米の道場より東
塔の内陣へ入る。果て大毘盧遮那經と題す。經卷有る。其
頃小戒を解て。因せし。猶も疑ひの解ぬ所あり。今本朝にて
疑惑を向明む。此上唐王へ渡りて名僧を尋求。胸中の
疑ひを解んもの。始て入唐の望とぞ。廿四年の年三教指
の清書とせし。廿七年阿州大瀧山を開基ある。其後三十一の年時相武
天皇。藤原葛野丸を遣唐使とす。副使石川道益。判官菅原清
公録。使ハ浅野鹿取り。是に依て空海師求法の為入唐せり。昔
を願ひ。則ち勅許あり。葛野丸の船は日船あり。此時小秋
最澄。傳教。學士。橘。遠成。も日船を願ひ入唐せり。時小延曆二十三年六
月上旬遣唐使以下の船肥前國松浦より出帆。海上障。八月十日小唐

土の港へ着岸。唐帝の觀察使濟美といふ者。和唐の使者と疑て。船
より上りし。十月十三日。船中小置。遣唐使葛野丸大に退屈。空
海師を招て。書牘を作。めて其清美。方達。せり。清美其文章
の奇絶。たる。感。遂に疑念を暗して。遣唐使以下。船より上。せ。長安乃
都。送り。空海師の文。羊。籍。載。斯。空海師。翌年。三好唐の西明寺。乃永
忠和尚の故院。小。其比。唐土。小。碩德の。聞。高。龍。寺。の。慧。果
阿闍梨の。許。始。謁。見。あり。慧。果。満。顔。小。喜。色。と。表。我。你。と
待。更。久。と。て。旧。相。識。の。言。談。懇。小。宣。侍。法。義。と。議。論。と。緒。の。秘。法
を。授。け。ら。中。小。五。部。の。灌。頂。三。密。加。持。の。法。を。傳。授。大。悲。胎。藏。曼。陀
羅。の。灌。頂。を。わ。り。空。海。師。華。と。擡。毘。盧。遮。那。如。來。の。身。上。小。著
され。慧。果。阿。闍。梨。大。小。是。を。賞。讃。者。乃。年。七。月。小。空。海。師。又。金。剛

曼荼羅小臨と五部の灌頂を受華と抛て再毘盧遮那佛の身上小著ハ
されんを阿闍梨アハツリと大の賞嘆あり。二度ありと二度と毘盧遮那佛
小抛得る更古今いまだ例をばとて六絨ロクニウ小凡夫あも昔釈尊秘密真
言の印を金剛薩垂コンガサツチ小付属フツクのの薩垂サツチを龍猛菩薩リウモウサツサ小傳ツツられり
展轉テンテンして不空三藏フクウサンザウ小傳ツツり不空フクウと我小授けられり。你ニとる小秘密大
根器あり。依て我金胎ゴウタイ二部の大法秘法ダイホフヒホフ緒の印信インシン及び金剛頂瑜伽コンガトウユカ五部ゴブ乃
真言マコトコトワザを悉く授けり。とて懇小傳授コンツツツツ。你ニ此金剛乘教コンガトウジヤウあも三藏サンザウの所付供
兼付物カネツモノと云々本國ホンクニ歸り緒州シュウ小真言秘密マコトコトワザヒソカの法ホフと云々よ。去るを四海シヤウカイ太平タイヘイ小
て万民豊饒マンミントウニョウあり。とて緒の經論ケイロンあも健陀國ケンダクニより傳ツツれる袈裟ケサ日珠ニクシユ
數ホスウホと云々遍照金剛ヘンシヤウコンガウとを号けられん。空海師クウカイシ歡喜踊躍カンキユウダク小堪カンと深
く師恩シオンを謝せられん。其後慧果阿闍梨ケイカアハツリと入寂ニヤクの期キ近チカれを知

覺ありて空海師クウカイシを招マツて我徒弟ケガシテ數多ありと云々。皆其器量ケイリヤウ狭ヒヤマく根氣ネキ
薄ウスくして佛法ブツポフの蘊奧インオウを悉く譲り授けり。足タラシと云々。此コノの裏ウラり
師弟シテイの契約ケイギヤクをわ。我秘訣ケガヒケツを盡く傳授ツツ。今望足イマノゾクと云々。我已ケレバ現世ゲンセの化
縁エン盡ツクみんと云々。前マヘの經論ケイロン佛具ブツクあり。と云々。尚ナカ又
遺ツグる宝器ホウキと譲りよ。と云々。佛舍利ブツセリ八十粒ハチジュウハチリク。舍利セリ一粒イチリク有アル。白縹ハクヒヤウの大曼ダイマン陀羅タラ
五宝ゴホウの三昧耶サンマイヤ金剛コンガウ及び種シユの靈器レイキを悉く授け。懇心コンシン遺言イツゴンあり。と云々。程マダふ
く病床ヒヤシヤウ小亦オモ卧シ。遂ツギ小唐トウの永貞元年エイテイノトシ十二月ジュウニゲツ十五日ジュウニヒ吾手ニガテ小密印ヒソカノインと結び眠ネムが。と云々
儼ゲン化カせられん。緒ツグの徒弟テテイの悲歎ヒツタンあも。我ケレバ空海師クウカイシのシて歎ツクの色シキ漂ヒラ
く紅淚ベニナミ小三衣サンイの袂タビを綴ツグ。と追戀ツグイの念ネンあり。と云々。則スなち師シのシ祭マツリ
碑イシを建ツク。自身コノミタマ碑文ヒシブンと作り。慧果阿闍梨ケイカアハツリ一代イチダイの道德ドウタクを綴ツグり著アハされん。其
文辞モンジ絶妙ツツセウあり。と云々。唐朝トウテウの鴻儒クウニウ碩德シヤクタクも其コノと賞美サウビ。人ヒト小贈オウ。と云々

空海師くわうかい不空三藏ふくうさんざう高德こうとくを慕あこがひ其その往ゆく所ところへい尋たず行なく相あ見ませられられる不空ふくう
大おほ小こ怡よろこび我われ幼わか者ものの昔むかしより佛ぶつ門もんにい入いりて晋しんのこ五ご天てん竺ぢくをい経きやう歴れき修しゆ行ぎやうして此この唐たう土どにて
法はふをい私しにい更さらして海うみにい没ぼつせり日本にっぽんへい渡わたりて私わが法はふをい欲ほむるもの期まにいちに熟じゆくせり身み
己おのれ小こ老らうらう然しかるる我われ小こ逢あひて我われ宿しゆく願げんのい達たつとらぬる時ときにい依よつて我われ譯やくせり華け嚴げん六りく
波な羅ら密みつ經きやうにいおのびて秘ひ密みつのい経きやう論ろんをい授まけり我われ小こ交かうては倭わ國こくのい法はふをい弘ひろめりとす
されりとすとす空海師くわうかい歡よろこびし堪たむらずに即すなはちに止と宿しゆくして諸しよ經きやうのい秘ひ訣けつとい悉しやくくに學まなぶる竟さ哉や
干かあらむるとすては來きぬる其その舌した上うへにい通つう達たつせりけり不空ふくう其その俊しゆん力りきとい深ふかくに感かん賞しやうして南なん
天てん竺ぢく龍りゆう猛まう喜き薩さつよりい傳でん來らいせり三さん股こ拵しゆ及およびし緒じゆのい經きやう卷まきとい盡じんくに附つ屬ぞくせり
るる空海師くわうかい大おほ小こ怡よろこびし拜らい受じゆとい恩おんをい謝しゃして詳しやうとい告つぐに旧きうのい西さい明めい寺じのい故こ院いんへい歸かへ
りし任まりし唐たうのい帝てい憲けん宗しゆ皇わう帝てい空海師くわうかいのい博はく文ぶん法はふ德とくをい睿えい聞ぶんあつては宮みや
中ちゆうへい召めさし緒じゆ經きやうのい文ぶん義ぎをい問もんふに空海師くわうかい悉しやくくに言げん下げふに答こたへりとす更さら御ご音おんのい物ぶつ

小應せうおんむすむすかか如ごとくに憲宗帝けんしゆうてい其その剛かう記き能のう并びやうとい大おほ小こ感かん賞しやうありて重おもくに喫き食じやく應おん
一い繪え帛ぼく珠しゆ玉ぎよくをい賜たまひし宮みや中ちゆう小こ苗めうめては種しゆくに宣せん侍じのいひを多おほくに宮みや中ちゆう小こ三さん間かんのい張ちやう壁へき
ありて晋しんのい右う將しやう軍ぐん王わう義ぎ之の手て跡せきをいとらぬる小こ羊やう經きやうにい破は壊くわいせりとす今いま
般ぱん二に間かんをい修しゆ理りせりとす筆ふでとい下くださしては程ほどのい能のう書しよとい得えられしとす其その尺しやく寸すん有ありて
々々れを憲宗帝けんしゆうてい空海くわうかい和尚わしやう小對せうたい師しのい能のう書しよのい安あん高かうして此この壁へき小こ一いつ筆ふでとい渾こんいへとす
仰おほぐる小こ師しといもも辭ことする色いろなく左ひだり右みぎのい手て足あし小こ筆ふでとい執とりしとす小こ筆ふでとい會あはりとす五ご
所ところ小こ五ご行ぎやうのい書しよとい同どう時ときにい書かけりとす其その筆ふで勢せい墨ぼく色いろ殊こと絶たつては龍りゆう牙が虎こ爪づめといももいへとす
るる古ふるのい王わう義ぎ之の王わう獻けん之のといもも猶なほ及およびしとす斗たうなるに今いま之の間かん小こ六りく墨ぼくとい盤ばん小こ入い壁へき
小向せうかうへいとりとりぎぎりりけけられる小こ自じ然ぜんとい樹じゆのい字じ小こままりし上うへ下くだ左ひだり右みぎのい位い置ち正ちやうとすとす
々々れを帝ていもも諸しよ臣しん下くだもも是こゝをいとらぬる人ひと敬けい馬ま嘆たんせりとす帝てい睿えい感かんのいあつりし
東あづくて五ご華け和わ尚しやうといりし号ごうといとす下くだされる藏ざう小こ前ぜん代だい例れいをい定さだむと後ご代だい又また有ありしとす

能書のりよふて敢あて凡庸ひんようの及およぶる所ところあり。唐帝たうていて海和尚かいわうを深かみく尊信そんしんあり。願ねがく八師はつし永ながく朕ちんが國くに小留こまりし朕ちんが師しと仰おほむ大寺たいじと建たて住すむと宣のたまひ
々々れも空海くうかい和尚わう承伏じやうふくの色いろなり。君命きんめい滅めつふ忝かたじけないも。拙僧せつそう身みを忘わすれ命いのちを
抛なつて遠とほく蒼溟そうめいと渡わたり貴國きこく小来こまりし佛道ぶつだうと倭國やまと小弘ここう也なり。普あまの衆しゆ生まむ
化度けだせんともあてられ。恐おそむる王命わうめい小焦こあつむ難がたしと詩うたし中なかされ。唐たう
帝ていも抑おさりてままま更あら能あたむ。現世げんせいの契ちぎハ薄うすくとも。来世らいせいハ師しの教化きやうけと永なが
受うむ。燈とうふとま宝庫ほうこハ秘置ひちむ。菩提ぶだい子の珠數しゆずと給たまふ。其その余あ等らの
宝器ほうきと下くだされ。和尚わう大だい小怡よび謹こまんで頂戴ていだいあり。右みぎの念珠ねんじゆハ今いま猶なほ東
寺じの宝藏ほうざう小納せうなり。其その後のち空海くうかい和尚わう城中じやうちゆうの東西南北とうしなんぺいを巡めぐりて遊覽ゆうらん有あり
所ところ小流せうりゆうの洞河どうがあり。少時せうじ停とどむ水相すいさうを觀みて在あり。忽たちち一人ひとり乃すなはち童子どうじ
隠かくれと出来いたり。空海くうかい和尚わうつとま童子どうじの体ていと見みる。小蓬せうぼうの髪かみハみれ

肩かたふらと身み小着せきる藤ふじの衣えハ破やぶれ膝ひざも見みたり。時ときハ童子どうじ空海くうかい和尚わう
ハ師し兄にいハ倭國やまとの五筆ごふで和尚わうおて在あり。向師むかうしありと答こたへられ。童子どうじが曰いわ
ふ。此こゝ流ながる水みづの面おもてハ字あざと書かけて見みせ。何所いづこより筆硯ふですゐをとり来きりて和
尚わうの前まへハ置おけり。空海くうかい師しハ安やすれ義ぎありとて筆ふでと執とり水面すゐめんハ清水しみずと瀝し
詩うたを書かけたる。点てん少すくも乱みだれ。鮮あざみ文字もんじ浮うりて流ながれ下くだりたる。小重せうじゆう子こハ
屢しばしば感賞かんしょうし。師しハ做あひて我われハ一字いちじと書かけて試こめり。筆ふでと執とり水すゐ面めんハ草くさ
書かけり。字あざと書かけり。是こゝも水みづハ浮うりて筆勢ふでせうハみれず。又また流ながる。更さらに我われ
ハ字あざハ右みぎの点てんをうかり。空海くうかい師し童子どうじハ向むかひ何なに也なり。点てんをうかり。と問とひ
と問とひ。童子どうじ完まりて。実まこと志こころとゆひ。と言いふ。筆ふでと執とりて。つとむ。つとむ。つとむ。
勿ならむ。山河さんか鳴動めいどう。水面すゐめんの龍りゆうの字あざハ真まことの龍りゆうと変かり。光ひかりを放はなち。鱗角りんかくと鳴なり。雲くも
呼よび起おこして。虚空こくうハ飛昇ひしやうりたり。其その時とき童子どうじも更さらに躍たび。龍りゆうの背せハ乗のり。つとむ。つとむ。見み



文
 現 文 雄 童子
 空海 小
 奇 瑞 心 月 旦
 一 乃 夕

るるか忽ちとて端嚴微妙の法相と化して是文殊菩薩なりと宣し声ゆるとも小虚空よりせのひくは是木の奇持を首とて百般の不思議と現しより更限たりをれを唐朝の君臣及び下々の万民まで活佛の如く尊び

空海師 師朝鎮難風 投筆并蘭溪書額條

去程小空海和尚ハ慧果不空両知識及唐土の名僧小悉く得見して求法残る所なく学究り在唐已小三年おむひんが今ハ歸朝せんと思われ折柄學士橋逸成ハ勤學畢リ歸朝せんとすれり幸の船連よとて唐帝ハ歸國の義を願ひ其比倭國の使者高階真人の船唐土来リれを空海逸成其船小便船を乞遂小唐の元和元年 歸朝大八月上旬小纜を解く出帆し順風任して船を走せり程小其疾れ更矢を射りて三四の間に數百里を過ぐる所小忽ち日和更り東南の空小一朶の黑雲起るよとん

る間もわく俄然として悪風大急吹出し逆浪山の如く起りて天を漫し船と洶上洶下と小水主楫取大に狂れ急小帆を下り地方へ寄んと働けども叶はざり船ハ悪風の如く吹舞され今や此船海底小沈むるをくんんく小船中の上下顔色如采ありや底の水屑と成ると強だ感ひ生じ心地小あうりくおれ空海和尚ハさの難風逆浪とぞ思ふと手小密印を結び端坐して自若として脚坐するが衆人の回悲心を見て哀救の心林平がく稍座て起て船の艦小立出のい高声小何ハ大龍王より出り我遠く求法のより小入唐せし一身の成佛得脱を求ん為りやを普く人天禽獸虫魚小いる逆甘露の法味と得ましめ未代濁世の一切衆生を済度せん大願かり傳聞ハオの龍女世尊の妙又とけの成佛ハ永劫末世まで佛法を守護せんと言願をましめ其其林言の如く此船を過ちなく本國へ著りめり我無更ハ歸朝せを國家鎮護の為一大徳也

を建^ん立^りて衆生済度の法燈を灯^りと誓^ひひ不空禪師より授^けりひ南天
竺龍猛菩薩傳來の三股杵を取出^し心中祈念^し此宝器の由^り処^に伽藍を造^ら
立^せんと天^に向^ひて抛^げちまて不思議ありふ三股杵ハ飛鳥の^て空^を飛^び去^る
東方^へ私去^り今^{まで}荒吹^し惡風漸^く吹^止高浪鎮^りて船穩^らふ成^れれ眞人逸
成^るを看^みて船中の諸人^は歎^息牛^心地^を是^れ眞人逸^成る^を空海上人の法徳^に依^りて万^死を免^れ
是^れ二生を得^りと^し悦^び一日^の合掌^し空海和尚^に礼^拜す斯^て風浪^収り
追風吹^て船平^ら小大洋を走^り平城天皇大同元年十月十三日筑紫太宰府^に著^す
船^をれ^を眞人遠成^{即ち}空海逸成^と太宰府^に請^ひ入^り船中の勞^と休^め其^の身^に
唐帝の回報^を都^へ奏^聞せん^る出^して空海和尚^に授^けり^し經卷佛具
を二卷^の小記録^し眞人遠成^{不言}傳^て都^へ上^りされ^り斯^て翌年大同二年正月空海
和尚^橘逸成^と俱^小太宰府^と發^足して都^へ上^り禁廷^へ参^内あり^し歸朝^せり^し旨

と奏^聞し前^の小記録^と奉^り如^く唐^主未^だ得^ず所^の新譯^の經卷^{二百四十二部}梵
字^{眞言}の續^等四十二部論^章三十二部佛^像十軀佛^器九種^慧果^阿闍^梨
より附^屬の宝物^{十三種}れ^も金^銀の^珠玉^の軸^小莊^嚴と^々々^を奏^獻
あり^しを平城天皇大^に睿^感在^り無^事の^帰朝^すま^の重^宝と^獻ぜ^り義
を御^褒賞^{あり}て種^々の^賞物^を賜^り傳^來の^眞言^密乘^を天下^に流^通と^す
此^のの^宣旨^と下^{され}高^雄の^神護^寺と^給ひ^て任^名せ^りひ^{たり}此時^橘逸^成
も^も入^唐勤^学の^功を^御賞^美あり^て是^れ又^種々^の御^恩賞^を下^{され}り^し去^程小^空
海和尚^ハ高^雄神^護寺^小住^持專^ら諸^弟子^と教^属天下^に眞^言密^宗を^流通^せ
んと^昼夜^心神^を凝^りひ^{たり}然^る朝廷^ハ平^城天^皇御^疾病^小依^て宝^位を
春^宮小^護ら^せり^し平^城の^旧都^へ遷^りひ^共嵯^峨天^皇の^御宇^となり^しま^も弘^仁
元年^と改^めり^し内^裡の^諸門^を修^りて^工匠^の功^已畢^{たり}と^東山^の門

額ハ嵯峨天皇御手づり龍筆を揮ひ宸筆と下よハ北方の額ハ橘の大
夫逸成不勅して書せのハ南面三門カハ小應天門の額ハ空海不書せむ下
と勅詔下りしを空海和尚謹んで勅命小應ト筆と添て四面の額を書け
小其筆勢鸞鳳碧落小翔るがごとく龍螭蒼海小游小似る張芝羲之も
妙を奪れ鍾繇蔡邕も愧を懐るごとく是々然如何なる更小や應
天門の額をうちて後緒人是をんた應の字の上の圓点を書落されし
む諸人亦私私空海ハの能書も應の字の点を落されし空海も筆の誤
りありと辨辨しるもふと和尚の弟子達聞げし思ひ師小向ひて應天門の應
の字ハ点をちりぬるハ御所存ありての御事おやと問を空海師微笑し
のハ何の所存もあらずと後より点を加んと思ふかちと失念せしかりしと己
不掛る額をとり御書も煩はし其後して点を加ふとて硯筆と持しめて

